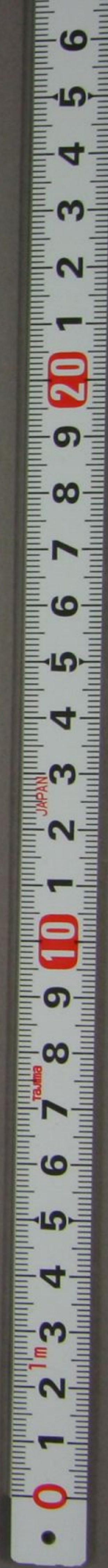


114
A 278



一土列立志社板垣嶋本園本等由守ラ擔當ス國憲
ヲ建テ民權ヲ張ルノ詭ヲ主張シ常ニ政府ノ非ヲ
顯ハシ機ニ乘シ宿志ヲ達セト欲ス其黨與凡五百名曰
兵隊ノ者大底加入セリ高松分營詰ノ内ニモ社中ノ者
兩名アリ營中ノ社士ヲ煽動シ其黨ニ加ヘントス當時
東京ニ寄留スル者四十余名時々集會シテ事ヲ議
巨魁山路仲七北村長兵衛諸所周旋シテ府内ノ
景況ニ至ル迄具サニ本國ノ法進ス先般其臺灣征伐ノ
事ニ付米國ニミストルヨリ建言ス因テ廟堂ノ御議論
紛紜タリ其節山路北村ヨリ板垣ニ至急上京スヘシト
報知セリ板垣因循ニテ機ヲ失フ頃日愛妾病ニ臥ス之
ヲ聞テ私情ニ堪ス上京ス山路北村大憤怒シテ此事ヲ

大正十一年四月
隈侯爵邸寄



象ニ告ル象憤發激論ニテ止マズ終ニ絶交ノ談判ニ
及リ板垣大ニ窮迫ス後藤佐々木相議ニテ和解セリ
ヲ盡カスト雖モ象聞カスニテ和眩未成ラス

一板垣黨ハ方今政敵ハ異論ナシ只在位ノ大臣ヲ貶黜
セシト欲ス全ク左大臣ノ論ヲ左袒スルニ非ス然レモ前条
猜忌ヲ生セシヨリ板垣ニ遠從スル者ハ今般同行セシ
中彦太秋澤清吉古澤迂郎安園道太郎岩
ノニ其他愛心セシト

一安園權馬ノ黨二百名アリ是ハ左大臣ノ論符合
因テ事ヲ共ニセシト欲スト最モ三條家岩倉家ニモ方今
ノ事情建白セシト

右安園ヨリ多田弘齋ニ談話ノ趣多田ヨリ承リ候

茶之
案
江丸



大正十一年四月
環正侯爵郵寄贈

頃日高知縣ノ景況日々ニ勢逼リ頻
リニ下等社會ハ板垣ニ迫マレ氏ハ
是ヲ拒ミテ居ル趣ナリ
昨十四日ハ糸ノ川寄ノ別荘ニ集會ス
ル者ノ先午前ニ大雨頻リニ降テ延
會セシ故ニ不日必ス大會ノ舉アル事
仍テ談鼎ヲ四課ニハ極々密々手ヲ
入レテ居レリ既ニ昨十四日佐々警部
ト密ニ舟ヲ浮テ景況ヲ伺ヲ外果テ



前頭ノ大雨ニテ延會日セシ赴キ残意
亦歸途新築ノ土堤ノ木陰ニ舟ヲ
寄セ住息セシ外大谷正光小谷正光ノ
傳年トシ植木
杖登其他員亦他縣ヨリ來合ノ人々板
桓ニ集會セシヲ見受タリ
亦立志社ヨリ阡陌ニ貸付タル金貨至
急ニ取纏メル赴ナリ
過日十日舟ニ上取セシハ廣瀬為貞子尾
喜壽其他村田徳次郎お惣レテ六七名
ナリ

同日吉村可成ト申ス代言師南屏社ハ北
々長
山越レニテ上取セリ亦十五日早朝ニモ潮
江ノ人ニレテ前田某ト申者同越ニテ上取
セシ由
亦幡郡ヨリ一名歸リタル入ノ嚙ニ談郡合
立社ハ夥シク金ヲ募ル赴キ亦社長ハ
林並明有造ノ甥
亦岩崎旧令西野おハ是又全ク金ヲ募ル
ノ策ヲ施サントレテ尽カ中ナリ
亦甲巡查ノ免職連ハ皆々不殘甲湯社

負トナレリ

同社々負ホ一昨十三日ノ夜上町新地花
井ニ登楼セシカ其時ノ人負ハ殆ト三拾
人余音趣不分

毎夜巡査ト社員ノ喧嘩ナキ夜ハアラス
亦喧嘩中見物人ハ多分農商ノ民ナリ
其甚チノ人民側ヨリ巡査ヲ嘲弄スル
實ニ甚レキナリ

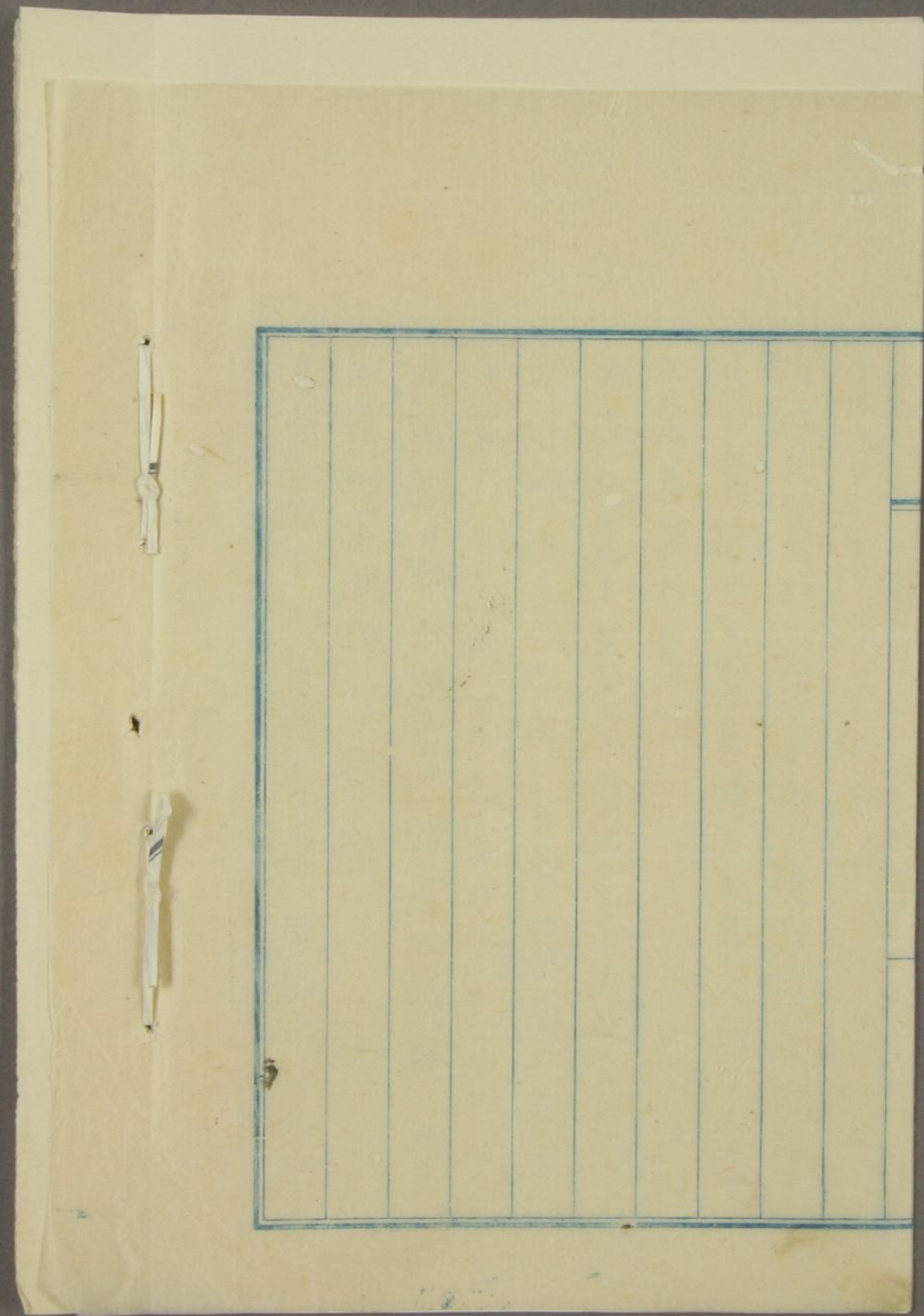
亦流行ノ歌ヲ作りテ諸所ニテ讀ムス
ルニ甚レ皆甲陽社ヨリ作出セシ也
不日回返
ノ管

近頃ハ次亦ニ手廣クナリテ東国

音森
新写
サ沼木

ヨリ三四名来縣セシ趣ナリ

高屋洗三郎外四五名一昨十二日橋郡ニ赴キ
タリ





十年七月七日

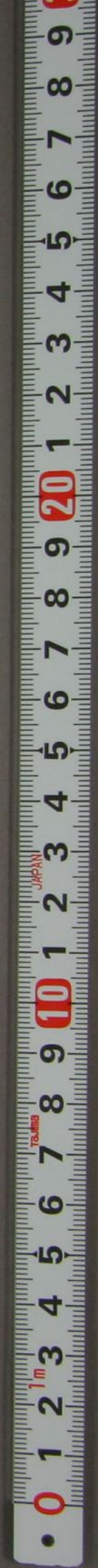
大臣

参議

友

別紙握山少将より西郷中将より
素束方より参議より
監製方より

天
正
十
一
年
四
月



別紙様山少代ヨリし書東到身及
 字々并多居迄差進軍尤其
 面中才二項未文此後亦毋
 延之様う失るに至る云々
 右着手し義の文不地
 様此の及申す事軍心組
 置お成度見又海軍中
 中代と別紙書東身
 所せん及さ廻り也

七月六日

陸軍中將西郷從道

奉儀大之保利通俊

奉議伊藤博文殿

此書の序文を以て其の意を
示すべし

此日の文通ノ旨は當國士族之中一益ヲ為
知ルル我族ノ者ナリ(但し自物社あり)中村楠屋
文通ノ字に少シク詳細ニ其旨ヲ述
レシ事ナリ信信ハ保セザル事ナリ
ウチ成ル事ヲ述テ

中村殿ニモ里々通シ

七月

渡邊 央

滋野 殿

高知縣下ノ事偵探偵ノ為ノ敷而幅多郡中邦邊江
サ荒尾小警部差遣置キ度曰人表ハ高知縣ノ人
コレテ從前戸長ヲモ勤ナレ者故彼ノ地方ニハ懇
意ノ者モ多ク曰即山田村住今思通信ハ旧友ノ事
故近日面會談話時勢ノ事ニ及候知今思大ニ
誤地方ノ事情ヲ概歎シテ云ク當地方ニ族寺
堂印ニ彈藥ヲ賞求シ且ツ軍費トシテ各自金
二十圓宛ヲ出シ相會スト此機ニ未レ余爲テ其
負ニ加ハリ彼寺ノ謀略ヲ探リ以テ國恩ヲ分
ノ一ニ報ヒント遂ニ其負ニ加ハリ去レ一日夜中村
住宮崎嘉造方、會合ス其人負凡ソ五十名
或ハ之ヲ迷ニ事ヲ奉レト或ハ之ヲ時期未ク至

ラスト論議終々遂に決セス然ルニ大石弥太郎
現今高知ニテ決テ彼ニ取レト議茲ニ決シ
去ルニ下田浦ヨリ川並ニ集ミテ河村太郎ヲ高
知ニ差遣ル事

富永有隣ハ此等ノ臺ト盟約シ連判状ヲ造リ
現今ハ高知ニテ大石弥太郎市ニ滞伏スト云フ
又彈藥ハ中村高人叶巻美太郎御巻而太郎
下田浦商人茶屋ヨリ買求レテ現今ニ
萬世發シ貯有ヤリト云フ故ニ富永等ヲ縛シ及
彈藥實分市ノ義ニ付下官ヨリ警部補瀧本
敏春ヲシテ書ラ高知縣令及ニ北村中佐ニ送
リ以テ中村中佐ノ事柄ヲ執シ且ツ之ガ実分ヲ
ニテラセフ然リト云フ此後實分ニ遷延レテ機ヲ

失スニ至ラハ而幸 水泡ニ属シタリ確實ノ
證據ヲ得ハ當地方ニテ速ニ着手可致候事
前陣ノ次第委曲海軍中尉飯田信臣ハ申
合メ差登候間詳細に取取ノ上申被
下度又先般通計丸末着ノ節被仰下候件ニ
逐一了承仕タ中増兵ノ義ハ通りモ及上
申及通り自ラ取取等可有之ニ付可致候
所引被下度申段及上申也

十年七月三。

陸軍少佐 梶山新介

陸軍中將 西御從左 殿

六月八日附御状今廿三日小林氏より受領捧持仕小
園家益御清祥奉口契次、近弟義七、美五所仕、旨
乍悖由放直、し相和岡制事、之昨廿二日夕刻、之此地
弟致、今日出勤相成申、此人、之苗口姓名、之取、之居、之氏
未夕一函會、之致、之不申、之以

將又自助社嫌疑云、之百燈坂御力煙霧、之相晴、之以
越國家ノ為、之系、之雀、之野、之杯、之并、之し、之る、之相、之苗、之地、之の、之社
し、之持、之標、之即、之今、之て、之ハ、之甚、之々、之切、之迫、之致、之る、之る、之系、之次、之ハ、之愚、之察、之致、之り
り、之右、之社、之ノ、之深、之奥、之ノ、之旨、之意、之ハ、之皮、之相、之ヲ、之以、之テ、之想、之像、之設、之り
申上、之れ、之却、之テ、之臺、之釐、之ノ、之差、之ニ、之千、之里、之ヲ、之誤、之ん、之ノ、之譬、之ニ、之テ、之容
易、之ニ、之申、之上、之兼、之又、之輒、之リ、之信、之用、之モ、之出、之来、之雖、之リ、之誤、之ニ、之謂、之フ、之燈、之臺
元、之暗、之ニ、之甚、之々、之當、之地、之ノ、之事、之情、之ニ、之疎、之ク、之シ、之テ、之其、之一、之端、之ヲ、之窺

得不然人心ノ恟々情態ヲ斟ニ巷説ノ
怪疑ス所ヲ撮テ左ニ陳申致ル所宜ク御取
捨ノ程ヲ乞フ也

○先般銃砲彈藥ヲ買上、お成ル所ハ〇の社ニ於テハ
余程之ヲ拒ミタル由然ルヲ板垣先生ハ之ヲ拒ム所ハ
益政府ノ嫌疑ヲ強堅ニスモナレハ此後求メニ
應シ膏渡ス如ストノ旨議ニテ一決シタル由尤モ幸西
屋ト云商人ノ手ニアリシモノナレ其事實ハ立志ノ士
蔵ニ入レ置キタルモノナリ千五百挺位差出タリ中ニ
大數ノ銃彈共ニ有シ越風聞アリノ今ヲ去ルノ廿日
以前程其何名所以トヤ其真意ヲ知ラ能ハスト
雖板〇ハ三日間程食事モセズシテ苦慮セ之タト
是ハ定テ〇〇〇〇負共ヨリ逼レタル故ナリトノ巷説

○立〇〇中ニテハ板〇氏ハ人望甚々薄クナリシヲ
証スル一事アリ市街無學人ノ説ニ板〇氏ハ
御一新頃ハエライ人ニテアリシモ此頃ハ板〇氏ハ
上ヲ越ス人物が出来タソウニヤ其人ハ片岡ノ吉
林ノ蔵ナト申ス人テ出来タ御方ナサウタト
云フ之ヲ見テモ此兩名ハ人望ノ歸ンタルヲ知
ス

○先般申片〇氏建白ノ為メ上京ノ跡ニテ右建白ヲ
政府ニ於テ未用スルヤ否ニ依テ向背ヲ定ル所ノ專ラノ
風説ナリ然ルニ今日ヨリ四日程以前ニ片〇氏ハ歸國
其翌日五臺山下申山へ社員ヲ集會シ何ヤ密謀アリト
云フ是ハ午後四時迄右會ヲ散ル所ニテ二拾五六挺人
力車ヲ揃テ歸ル途中現ニ目撃セシモノ多シ是ニ

付テ一話アリ其翌日卿中ノ肥取共ノ話ニ昨日ハ
軍ヲ天ヨリ降りタルモノカト問フニ否、現ニ五臺山ノ
絶頂ニ大勢集リ居タルヲ見タリト答タリト愚モ亦笑フニ
堪タリ

兼テ靖立ニ社ノ協合セタリハ新聞ガニテ五承知トハシ
此頃ノ風聞ニ建白成テ片ノ氏帰國シタルニ靖社
長ニ於テハ確乎タル目的モ立ルヲ無クシテ輕忽ニ建白ナド、東
西坂ヨリ馳セ回リ其申渡モナク空ク帰國スル何ソヤ
假令採用スルトモ参考ノ為ニ留置スルカ又ハ當分預リ置ク
トカ或ハ留メ置トカノ義ニテモ又ハ又モ格別セ凡唯只
突キ戻サレテ歸ルトハ無目的ノ空論ト故ナリト充分ニ駁
議セラシ是レハ大ニ閉口セラシトテ此靖〇〇ハ立〇〇
ヨリ人数多クシテ且強シトノ事ニテ此社ノ主議自謾

ナル歟何ハ知ラサレシレテ後賦ヲ弾城セシムルハ立國
ノ兵ニアラスニテ誰リ目的ナシノ建白ヲナシテ人ノ嗤笑
ヲ招クヨリハ西國へ出兵ヲ欲出テ此大變ヲ果シ終テ後
建議スヘキモノアラハ建議シテ可ナラント、事ナリトテケ
リ勇シテ然ルヤ否ハ信シ難シ若シ此説ヲ確実ナラ
シムル片ハ新聞紙ニ化セラレタルモノ乎可

〇此國ハ有名ナル社ハ立。靖〇ノニ社ナリ其外何
社何社ト認テ志アル者ハ無社ナルモノナシト土著ノ人ニ
問フモ其社名ヲ悉ク知ルモノナシ故ニ迂者探ハテ以テ
耳ニ入ルヲ得サレハ尙存ニ於テ猶信スヘキ説アリ是
ハ想像説ノ如クナレ立。〇於テハ靖〇党ニテ変事ヲ起
シタル片ハ速ニ之ヲ抑制或ハ撃破シテ切ヲ建シト究ヒ
又靖〇〇ニ於テモ立。〇党暴徒ニテラハ之ヲ一壓抑シテ

大
文
言

鼻ヲ高フセト静カニ之ヲ何フト如何ニモ形コリアラント
思ハシ此ニ社ノ外ニ高知城下ヲ去ル一四五里ノ野ニ
本園ト云フ所アリ茲ニ撃劍社トカ像トカ云フ組ア
リ其人教モ多カラサレ此組ノ人物ハ頑固ニタル
モノニテ野蠻ノ上等社會宛カモ蜂窩ノ如ク動モ
スレハ暴お没スルノ強暴社會ナリト云フ是等ハ現ニ立
亮ヨリ制抑シテ今日ニテモ在ナリト云此亮ハ言知
ヨリ西ノ方幡多郡ノ西也ニ声息ヲ通シ曰志輩
アリト聞ケリ恐ルヘシ怖ルヘシ
○板。氏ハ平乃垂釣ヲ事トシ一輩舟ヲ浮ナテ
遊遊儂儂シ居ルト云フ説ナリ西ヶが湖壑ニ從事シタ
ルニ倣フ歟
○頃。未甚夕間ニ忍ヒ難キ一事アリ演舌會ナリ

是ヲ市街ノモノ共ハ然ニ從テ後稱謂ス此後教タルヤ
何人タルヲ論セス公然聽少スルヲ許ス後教師ハ多クハ
立錫ニ社ヲ先立方ナレ由是ヲ聞テ表モノ話ス少クニ
大政府凡百ノ事皆非ナルヲ揚言シ口極テ議リ
者今テノ政令決シテ信用スベカラス回藩ノ施政ニ
軍ニキヲ得タルモノナレ回藩改ノ規則守ルヘリ大政府ニ
居ル一二ノ官吏カ甚人ニテ七八百圓宛ノ月給ヲ費シ下モ
方ヨリハ賦稅ヲ增加シテ取立而シテ一タヒ火ニ水ニ授スル
ハ、役ニモ立タル措幣ヲ通用ワル等ヲ説キ皇國遂
ニ、鬻先生ノ手ニ、隱ニトテ説リ等ハ吾人共ニ受フル所云ク
喜フヘキナレ左ニアラス已ニ共ノ決シテ政府ヲ頼ムヘカラスト此後
社存ヲ信用ナスルニエマナリ
教ヲ為スヤ日已ニ久シクソクノ民め何ニモ尤モ尤モト
相話シお傳ヘテの。社。社ト使社ノ人ノ成シタル一

言ハ觸レタルトモ如斯ノ事アリ言アリ之モ必立。
ナリト言フニ至レリ復見井蛙ノ愚民何タルトテ參
セス妄信妄稱立。出來人<sub>土佐國ノ人後秀ヲル
モノヲ稱シテ也事ト云フ</sub>ト歎稱ス
臣才片意地此言ヲ聞モイヤ
此説教ヲ為スヤ学校又ハ芝居小屋等ヲ以テスヨリ者
充満何ツモ雖ラ立ノ席ナシト云ク
○握リ飯ニツツテ帛沙ニ包ミ足ヲラシトテ遠足ヲ
横ラス大体格ニ三軍ノ儀也ヲ性返スト云ク
○撃劍ハ盛ニ行フト云ク
○市街ハ人ノ愚志古等ノ事ヲ行フヲ見テ却テ善
色アルカ知如何トナレハ日本國ニ三藩ノ一居ルニ為
知ノ立ノナルモノ今日事ヲ起スハ確辛然目的アツテ
必為ニ事ハ改務セサルヘカラスト復見ニ塗炭ノ苦災

ノ身ニ及フヲ知ラスレテ却テ頼母敷思フカ如シ是ハ善徳也
○兩三日前ノ説立。ニ於テ市街ニアル梅屋ノ酒樽
ニ升込升入シ位ノモノヲ残ラス賞上ケタリト云フ如何ナ
事ニ因ルモノナヤ又辨當行李モ同新ト云フ
○本月廿二日頃海軍少尉之藤本太郎三等海軍部若尾
某巡查百名ヲ率テ幡多郡ハ防衛ヲ為メ入込タリ
之レ付テ縣廳ヨリモ巡査を而余名目所ハ古也ヤ付
船所噂ニ天捧ノコニテハ古也セシトテ何ノ役ニモ立タセハ
常ノモ致シ交鏡彈ヲ持来シなる申出也所若シ事起
キハこの招送名申出ケタリシ。然ラハ事案ニテ其時
送り呉レル銃彈ノ現品ハ何トアリヤ一見シタ上古也致
成ト申出ニテ古也ノ命ヲ受ケタリ巡査本ハ一回引込ミ
タリト云フ

○義子以承分ノ直リ藤ト打和トニ名先リ捕縛
セラレタリ此西人ノ内々名ハ薩ノ相野ノ門人ナリ
藤ノ妻ハ村松ノ妹ナリ此名ハ陽國をヤ云幅
多ノ取在道ヲ奇まじゆ名ニテ親ノ持方テ一杯ヲ傾ル
一所ヲ傳セラレタリ是等ノ親ラニモノ夜モ穴渡スニテ其
上慮シ女トノ風録ナリ
少あ名ヲ傳スル片々今公ハ弟ノ深ノ深長ノ廣敷果
計ラスニテ捕縛セシメタリ依テ翌朝深多太ニ往ル
人ヲ以テ今公ニ之ヲ尋之ニテ返矢ナリト謝スニ於テ控
別ナレバモナキ片々建儀アリトノ深儀終終ナリト云
凡更録自ノ如何のまろウ身ノ一ヲ得ス
○土佐國ニテ人物ノ出んばハ四世下ニアスレテ於ニ三里
而ノ方依門ナリト云フ又第一等ノ人物ハ幅多

郡ノ極西ニテ宿毛ト云フ所ナリト現ニ片々氏モ此宿
毛ヨリ出名人ナリ當今此宿毛ニテ事ヲ起ス所
大将トモナ人物ハ

山田秀孝 石古某 副區長 竹葉退蔵

島崎政繁 ^{戸長}ガナリト云此竹葉退蔵モハ生
徒五六人アツテ孰レモ屈強ノモノ共ニテ殊ニ議

論ニ長セリト云フ

○高知ヨリ幅多郡ノ下田ト申ス所ハ通リ蒸氣
繁榮号モ今廿四日神戸へ出發是ハ政府へ借上ケ
ナリト云

○郵便書状モ時トヒテ届カズル儘アリ故ニ當地ヨリ
書面ヲ發スル氏容易ノ事ハ記載ニ難ニ途中開封
セコトモ差支ナキフコカギル

右ノ大畧ノ畢決チ人心何トナリ穩キズ即今當地入
込シ有之官吏ハ全ク賣ラセタリト云フモ証言ニアラザ
ハシ此際ニ至リ進退如何トモシ難シ思哀御推
量 吾輩軍カ察スル所ニテハ到底大變ニ至ラセテ
得ス事トモ後シテ後ニ軍兵ヲ差向ケルコトハ彼
是ニテ一決セサル内兵ヲ差向ケル鎮壓セシル方當然
ナランカ如何トモ兵ヲ向ケスルモ起ルモノナレハ速ニ
差向アツテ暴發セシムル所謂先ニ死スル人ヲ制
スノ理ナレハナリ

○當今佐のの官當地、下リ居レリ是に於テ高知ニ
事アリ、愛アリト言ハハ動エスハ彼カ入込レ後リ
ノ諭スノト言觸ラシ不都合ナレト一層激ラ
加ヘタリト云フ然シ本人格ニ暗殺位ハ有サチモノト

覺悟シ居ラルトノ説アリ是亦危キ哉

○七八日以前宇和島松山大阿邊ニテ或拾七八人
國事 犯ラ捕縛セラレタリトノ事ヲ守ケリ是レ
巻説ニアラス

○或ル立のの者が何波ノ人ニ向テ云フハカ松島ニ大
砲ヲ不持スルモノ有之由之ヲ當今者捕ヲレハ大
ニ直ニ去スレヘキコ付 妻掃ハ如何トヨ言ラヌ又ケタリ
砲ヲ先年陸軍へ引渡シタレハ後テ去ルコト
若フルニヤクアハト 慥ニ其處出セリト云フタト 是ハ人全 破
ナルヘシ
之ヲ又ル片ハ探索マ届キアハトヲ推知スルニ是レリ時
書面ヲ口ニ存存スル氏 郵便ノ如何ト然念シ
上ケ難シ此度事便ラ得テ其の事請ハスルヲ
得タリ追々暑氣ニ向ヒ以テ付時下所候 妻掃ヲ待

スルノミ 忍々不具

六月廿四日 認メ

楯廻舎大見

徳相

二 仲 筆ニ 隨カセテ 認メタシニ 宜リ 以 推 後 下 可
ニ 爲 也

末 筆ニ 十カラ 爲 本 失 生ニ 以 序ノ 爲 宜ク
以 爲 御 中 存リ 也